

第10部会

天理教原典Ⅲにおける

「かしもの・かりもの」の理

澤井 一郎

天理教原典の理解は、その記述に導かれながらも、初期の信仰者の遺した資料に耳を傾けながら深められるべきものである。原典は教義の源泉であり、教義の根幹が記された『おふでさき』（原典Ⅰ）、つとめの地歌である『みかぐらうた』（原典Ⅱ）、具体的な問題に対する指導のことばである『おさしづ』（原典Ⅲ）から成っている。

「かしもの・かりもの」の理は、「教えの台」と言われてきたほど重要であり、天理教の教えを理解する上で避けることができないものである。この「かしもの・かりもの」の理解を原典に求めようとすると、「かしもの」あるいは「かりもの」の語が手がかりとなる。『みかぐらうた』において「かしもの」「かりもの」の語はみられず、『おふでさき』においても六首のお歌にみられるのみであるが、具体的な指導書である『おさしづ』においては、「かしもの」「かりもの」「かしもの・かりもの」「かりもの・かきもの」の語が三五七箇所、二二六件の「おさしづ」（お指図）にみられる。これらの論しの背景には一定の教理理解があるのであって、そのことを見逃してしまつては十分な理解が得られない。

「かしもの・かりもの」の理が論されている二二六件の「お

さしづ」のうち、身上願と「おさづけさしづ」（おさづけの理拝戴のことば）を合わせると九割程度を占める。ここで注意すべきことは、「おさづけさしづ」は明治二三年七月におさづけの「おかきさげ」として一定となり、それ以降は変則的なものを除いて『おさしづ』に収録されていないという点である。このことをふまえると、「かしもの・かりもの」の理は、主として、「おさづけさしづ」において論されているという見方ができる。それを裏付けるように、「おさづけさしづ」の内容が、『おさしづ』において「かしもの・かりもの」の理が論される場合の基本線となっている。すなわち、量的にも「おさづけさしづ」が多く、内容的にもそこでの論しが軸になっているのである。

「おさづけさしづ」の内容が『おさしづ』における「かしもの・かりもの」の理の論しの軸になっていることは、別席と密接につながっているということでもある。すなわち、明治二三年一月に整えられた「初試験」における「身の内御話と八つのほこり」の説き分けがその背景にあるということを示している。それを心に覚えて説き分けることができなければ、おさづけの理を拝戴することはもちろん、別席の御話を聞くことさえできなかつたのである。それ以前からも大事な教理として心に治められてきたからこそ、「初試験」の内容が「身の内御話と八つのほこり」に定められたことができる。この道の広まりの要因はいろいろに考えられるが、この「身の内御話と八つのほこり」を中心とする教理の伝達がその背景にあったということである。

このように、「かしもの・かりもの」の理は、「身の内御話と八つのほこり」の教理とセットで理解すべきものである。より適切に言えば、この教理が「かしもの・かりもの」の理の土台であるということである。この「身の内御話と八つのほこり」の教理理解によって、原典における論しがより明確なものとなる。「かしもの・かりもの」の教理を、単に人間とその身体に關するものとみなす向きもあるが、そこには、神の守護や世界の治まり、そして、心の治め方についての根本的な洞察が含まれているのである。

「かしもの・かりもの」の理解を通してみてきたように、きわめて根本的な事柄が、当然の事柄として原典のことばにおいては隠されている。この隠れた土台を浮かび上がらせることによって、天理教の教えを深みと広がりをもって理解することができるのである。

戦後台湾における生長の家の受容層の変遷

寺田喜朗

本報告は、戦後台湾における生長の家の展開と受容層の変遷を明らかにすることを目的とする。台湾における生長の家の展開は、董芳苑・瞿海源・藤井健志等の研究で触れられているが、断片的な記述に留まっている。筆者は、一九九六年から断続的に調査研究を進めているが、その成果をまとめた『旧植民

地における日系新宗教の受容』（二〇〇九年二月）と、本年八月に行った補充調査に基づいて本稿の論述を進めていく。

生長の家は、戦後、日系新宗教の中では最も早い時期に布教を再開したが、創価学会（約十萬）・天理教（約三萬）・真如苑（約二萬）・佛所護念会教団（約一萬二千）等と比べた時、教勢は伸び悩んでいる。また文書伝道を核とすることからメンバーの流動性が高い。現在、六五一〇部の機関誌を発行し、聖使命会員は四二八四人、地方講師は一七四人である（二〇〇九年六月現在）。聖使命会員の中には名目上の信者も含まれ、地方講師資格者の中にも休眠状態にある者が散見される。以下では、主体的な信仰を保持し、アクティヴな運動の担い手として活動するリーダー層を中心に論を進める。

戦前、生長の家の信者はほぼ在留邦人で占められていた。若干名の台湾人信徒が存在したが、彼らは高い学歴／日本語リテラシーを有する日本教育エリートであった。誌友会は戦時下、休止していたが、戦後、邦人引揚げによって全滅する。一九五五年に戦前からの信奉者である王承通（一九一〇—一九八八）が独力で布教活動を開始し、彼を基点に信者ネットワークが形成される。戒厳令下、地下活動として維持された誌友会の参加者は、日本語リテラシーを有する高学歴層に限定されていた。王らは、一九六八年に韻文の雑誌を発刊する。これは日本語リテラシーの低い戦前世代の低学歴層への布教を企図して編まれ、発行部数は二千であった。一九七八年、戦後世代の日本語リテラシーをもたない層を対象にした白話文の雑誌が発刊され、最大で五千部発行する。一九八四年には、研究団体「生命